国際真宗学会第19回大会大谷大学パネル報告

『教行信証』の英訳の限界と英文注釈書作成の必要性について[i]

国際仏教研究　研究員　マイケル・コンウェイ（真宗学）

親鸞の思想が英語圏に紹介されるようになってから、既に120年が立っているが、「禅」と違って、欧米における真宗の知名度は極めて低い。その知名度の低さの原因について長年、考察してきたゲーレン・アムスタッツ（Galen Amstutz）氏は、親鸞の特異な引用法をその要因の一つとして指摘している。氏が言うには、親鸞が『教行信証』において引用をする際に原文を大胆に省略した形で提示し、または独創的な訓点を施すなどの様々な工夫が「呆然とさせる言説」であり、「奇異で一風変わった読み方」[ii]であり、浄土真宗の伝統に既に属しない者にとっては「困惑の種となっている」[iii]であるから、真宗の思想の伝播に際して大きな障害物となっている。

またアムスタッツ氏は現在ある親鸞の主要な著作の英訳について「暗号化された日本語を、同様にもしくは同等に暗号化された英語に置き換えて、勝利宣

※編集委員会注　本稿は要旨である。全文は大谷大学学術情報リポジトリ（https://otani.repo.nii.ac.jp）に掲載。

i　本論は2019年5月26日に、台湾・新台北市金山の法鼓文理学院(Dharma Drum Institute of Liberal Arts, DILA）において開催された第19回国際真宗学会大会にて行った同じ題目の発表によるものである。第19回国際真宗学会大会の参加およびその発表を含むパネル発表（「Problems and Possibilities for the Spread of Shinran's Thought in Contemporary Global Society」（現代のグローバル社会における親鸞思想の伝播の課題と可能性））は2019年度の国際仏教研究の英米班の活動の一つであり、本論はその成果発表である。

ii　「Subjectivities, Fish Stories, Toxic Beauties」『*Pacific World*』第三シリーズ第一九巻一一七頁

iii　同上

言をし、そして引き返すことは、決して妥当なコミュニケーション形態ではない」[iv]と述べ、翻訳のみによって親鸞の思想を西洋社会に伝える困難を厳しく指摘している。

筆者は以前に氏の指摘を詳細に紹介し、その困難を乗り越えるために『教行信証』に対する英文注釈書の作成が必要であると論じたことがある[v]。その論文において、親鸞の独自な引用法の事例として『教行信証』「行巻」における『十住毘婆沙論』の引用について考察を加え、親鸞の引用について原文との相違を説明し、親鸞の意図について簡単な解説を施すと、その独自な工夫は決して「困惑の種」ではなく、親鸞の思想の力点を浮き彫りにするものであると述べた。本論において、『教行信証』の英文注釈書の必要性をさらに論証するために、親鸞が多くの工夫を施している『教行信証』「教巻」所引の『無量寿経連義述文賛』（以下『述文賛』、憬興作）の文を事例として取り上げ、現在の英訳文献による限り、それは「奇異で一風変わった読み方」としか見えないが、注釈書という別のコミュニケーション形態を採用すれば、親鸞の引用法は、「他力回向による仏道」という独自な思想を鮮明に打ち出すものになると論じている。

本論は三節からなっている。第１節において「教巻」の内容を簡単に紹介した上で、憬興の『述文賛』の原文の内容を確かめ、そしてそれを大幅に改変している親鸞の引用を提示した。第２節では、「教巻」における親鸞の引用の意図について考察を加え、親鸞の引用の工夫は憬興の原文と異なって、釈尊と阿難の相違を曖昧にし、釈尊の覚りの背景にも阿難の気づきの背景にも阿弥陀仏の徳があるということを示すことに力点が置かれていると論じた。第３節では、現在ある英訳『教行信証』の全訳３種と鈴木大拙氏の部分訳における当該箇所を紹介し、それらの訳から憬興の原文の意味すら読み取ることが困難であり、親鸞の独自な引用の仕方の意図について気づくことはとうてい不可能であることを指摘した上、その問題を克服するためには『教行信証』に対する英文注釈書の作成が不可欠であると述べた。

以下において各節の標題を挙げた後、その概略を示す。

---

iv　『*The Eastern Buddhist*』第四一巻第一号一二六頁

v　「英語圏における浄土真宗―日本的特性によって閉ざされている普遍救済の道―」『日本佛教學會年報』第八四号三〇七頁－三三七頁

『教行信証』「教巻」所引『述文賛』の文について

『教行信証』「教巻」において親鸞は、『無量寿経』の発起序から、阿難が釈尊の徳を５つの側面からたたえている「五徳瑞現」とそれに続く問答を引いた上で、『無量寿経』の異訳から２文を引き、そして『述文賛』において「五徳瑞現」とその問答の最後の文章に対する憬興の注釈を、大胆な省略をしつつ部分的に引用している。本節では、憬興の原文の意味を確認した上で、親鸞の引用の内容を示した。

「教巻」に引用されている『無量寿経』の原文において、阿難は釈尊をたたえ、「今日世尊住奇特法。今日世雄住佛所住。今日世眼住導師行。今日世英住最勝道。今日天尊行如來徳。」[vi]という「五徳瑞現」を述べた上で、釈尊の覚りが「去来現の仏を念じ」ることによって成り立っているのかと釈尊に対して問いを立てる。釈尊は、その問いに答えるに先立って、阿難が自身の「慧見」によってその問いを提示したかということを確かめた上で、大いに阿難の洞察力をほめ、その問いが多くの衆生に利益を及ぼすと述べている。そして釈尊は最後の文章において、如来の正覚に四つの特性があるということを阿難に伝えている。

『述文賛』の原文では、憬興は、先行する『無量寿経』の注釈書の内容に言及しながら、「五徳瑞現」およびそれに続く問答の最後の文章を偏に釈尊の勝れた特性をたたえる文章として理解し、その経文内の意味的関連について詳細な考察を加えている。親鸞が「教巻」において引用している「五徳瑞現」の個所では、憬興は阿難が釈尊をたたえる時に用いられる五つの呼称（「世尊」「世雄」「世眼」「世英」「天尊」）と、たたえている特性（「奇特の法」「仏の所住」「導師の行」「最勝の道」「如来の徳」）とが関連しているということを示している。また親鸞が部分的に引用している最後の文章に対する憬興の解釈においては、釈尊が述べている５つの側面（「如来正覚」「其智難量」「多所導御」「慧見無礙」「無能遏絶」）が、阿難がたたえている５つの特性に対応していると論じている。これらの解釈において憬興は、釈尊が他のいかなる聖者よりも勝れていることを提示する文章としてこれらの経文を受け止めている。

一方、親鸞の引用では、他の注釈書への言及が完全に省かれているのみなら

---

vi　『大正新脩大蔵経』一二・二六六頁下段

ず、憬興が論証しようとしている内的関連性についての記述も多く省略されている。また、最後の文章に対する憬興の解釈について、親鸞は、所釈の範囲を変更し、さらに経文自体を省略し、釈尊が述べている５つの側面の内、３つだけとそれに対する憬興の解説しか引用していない。

親鸞の引用の意図について

本節において親鸞がこのような工夫を施した意図について考察した。『述文賛』の原文と親鸞の引用で意味が大きく異なる個所を三つ取り上げて、その意義について考察することを通して、憬興が『無量寿経』の文章を偏に釈尊の功徳をたたえる言葉として受け止めているのに対して、親鸞の引用の工夫は釈尊と阿難の区別を曖昧にし、両者の上に阿弥陀如来の功徳の顕現を見据える文章に作り変えていることを論証した。

まず「今日世雄住仏所住」に対する注釈として、憬興が「如来、諸仏平等三昧に住して」と述べているが、「教巻」の引用では、親鸞はそれを「普等三昧に住して」という言葉に改めている。「如来」という主語を省き、「諸仏」への言及を第45願に用いられる「普等三昧」という語に変えることによって親鸞は、仏の住している境地を、あらゆるものの平等性を見ることができるものとして示し、しかもその背景に阿弥陀仏の願力を示唆しているので、釈尊の特異性より、釈尊と阿難の区別を取っ払い、いずれも阿弥陀仏のはたらきかけによって覚りを得るものとして位置付けている。

次に「今日天尊行如来徳」について憬興は、釈尊が「仏性不空」を知っているから最も勝れた「天尊」であるという意味として理解しているが、親鸞は、言葉を変更して、「如来の徳」は自然にあらゆる衆生を成仏に導くということを示唆している。それは他力回向を軸に展開されている親鸞の救済論の立場を明確に示すものである。

三つ目に『無量寿経』の問答の最後の部分に対する憬興の解釈を引用する際に親鸞が施した工夫の意図について考察した。『無量寿経』の原文では、この文は釈尊が「如来の正覚」の特性を述べているが、親鸞の特異な引用の仕方は、特に阿難の気づきの意義を示す文章として理解するように示唆している。

英文翻訳の限界と『教行信証』の英文注釈書の必要性について

本節において、今まで発行された『教行信証』の英訳によって上記のような親鸞の意図を読み取ることができるかについて考察し、それがとうてい不可能であるということを論証した。何よりも大きな問題は、『述文賛』の英訳がないので、第２節で行った原文と親鸞の引用の相違についての確認作業が完全に不可能である。また親鸞の工夫は破天荒な読み方を要請しているため、そのような意図を、訳語や文体の工夫のみでは伝えることができず、解説がなければ、読者には読み取ることができない。それに加えて、現在、最も参照される英訳４種における『述文賛』の文において、訳語が統一されていないため、英文読者は、憬興が述べようとしている経文の内的関連性についてすら気づくことができない。さらに訳語の不統一等により、いずれの翻訳からも英文読者には、前節で提示した形で親鸞が託そうとしている意味は全く伝わらないので、アムスタッツ氏が言うように現状では英文読者は困惑するしかない。しかし第１節と第２節で提示した説明を含む英文の解説書が作られれば、その問題は解消されうると論じた。

上記の考察を通して、親鸞の思想を日本国外に伝播するために『教行信証』の英文注釈書の作成は不可欠な急務であると論じた。